シラチャ校だより

泰日協会学校シラチャ校
2024.11.29

タイで「気付き」のセンサーを磨くことの面白さ

シラチャ日本人学校　校長　藤枝茂雄

「タイには、雨季と乾季があるけれども、日本のような四季はない」という話を聞くことがある。しかし、その言葉を鵜呑(うの)みにしてしまうと、頭の中のどこかで「タイには季節がない」という自分本位の固定観念に結びついてしまう。するとてきめんに、季節に関する観察力や気付きの精度が落ちてしまう。

季節に関する感度という意味では、私自身、昨年はニオンディレクターから「今日は涼しい風が校舎内を吹き抜けました。これは、雨季が終わり乾季の始まりを告げる風です」という説明を受けたことが印象深かったが、今年は、「ススキがたくさん見られるようになりました。これも季節の変わり目のシンボルです」と教えてもらった。タイの人々が自国の暑さを外国人に説明する際に用いる「タイには３つの暑さがある。それは、暑い、もっと暑い、大変暑い」という面白い表現があるように、「一年中暑い国」というイメージが強いこの地にも、雨季と乾季とはまた別の意味での「季節」の微妙な違いは明確に存在するのである。

乾季の始まりを視覚的に知らせてくれるシラチャのススキ

ところで、タイの季節感が「微妙」なことに代表されるように、様々なものごとの変化が日本よりも明確でないがゆえに、逆に自らが注意深くなることによって身近な事象に対する感度が上がり、新しい気付きが出現することがある。

たとえば、中学校社会科における東南アジアの学習の際に、タイの「米の二期作」という語句が出てくる場面がある。この米の二期作については、多くの人が、同じ品種を一年に二度植えて収穫しているというイメージで学習していると思われる。しかし、実際のタイでは、第一期作目のイネは感光性の強い（花芽（かが）形成時期が日照時間の影響を強く受ける）品種を植え、第二期作目のイネは感温性（花芽形成時期が気温の影響を強く受ける）品種を植えているのである。品質的には、土地の養分が十分にある田んぼで栽培された第一期作米が良質とされているようである。

竹細工を体験する本校第4学年の児童

また、11 月の半ばに第４学年の児童たちが竹細工の体験学習に訪れたパナットニコムのプラニー工房でも興味深い気付きがあった。「どうしてこの地域の竹細工がタイの一村一品運動（OTOP（オートップ））製品として特別に脚光を浴びているのだろう？」、「何が他の地域と違うのだろう？」という疑問のセンサーの感度をあげて、工房を経営するプラニーさんに聞いてみたところ、奥の方から一本の竹をもってきて「これを見てください」といわれた。なんとその竹は、節と節との間隔が 120 ㎝以上もあるような、まっすぐな竹だった。「この地域に自然に生えている竹だけが、こうした節と節との間隔の長さを有しているのです」と説明され、パナットニコム

は、竹細工の素材として極めて優れた特別な竹が自生している土地であるということが分かった。

日本の竹の先入観があると見逃してしまう、1mをこえる節と節の間の長さをもつ竹（チョンブリー県パナットニコム地区）

さらに続けて話を聞いていると、この地域の人々の先祖は、タイの近代化が進んだラーマ３世の時代（在位 1824-1851 年）にラオスのビエンチャンから移住してきてこの地に定住したという。つまり、パナットニコムの竹細工製品は、ラオ族（ラーオ族）が伝統的に有していた優れた竹細工の技術と、タイでも屈指の高品質な自生の竹の素材が合わさって生み出された地域の伝統工芸の貴重な逸品（いっぴん）なのである。

上記のように、身の回りの事象に対するセンサーの感度が上がっていくと、様々な「気付き」が増え、それがさらに、興味や関心を刺激して探究的な学びへのモチベーションを高めることにつながる。物事が多面的に理解できるようになると、単純に暗記していた「米の二期作」のような語句についても、「短日植物（たんじつしょくぶつ）（感光性の高い植物のなかま）」や「感温性の高い植物」に関する学びや気付きに結びついていく。そして、それらが転移して、「微妙な季節の変わり目を表す存在のススキ」についても、雨季と乾季という「降水量の多さ少なさ」や「暑さが和（やわ）らぐかどうか」などの自然条件の変化ではなく、「日照時間が短くなる」という自然条件の変化によって「穂のあるススキらしい姿」で私たちの前に現れてくることが分かるなど、身の回りの物事に対する見方や感じ方の変化につながっていく。

タイに住んでいるこの機会を利用して、児童生徒の皆さんは、たくさんの様々な「気付き」を楽しむことによって、自らの成長に結び付けてほしいと思う。

環境教育体験学習を終えて

７年学年主任　青木　奈緒美

シラチャ校では５年ぶりに、マングローブ植林体験を実施した。体験後の生徒たちの服や手足は泥にまみれ、表情はとびきりの笑顔で溢れていた。場所は学校からバスで 40 分程度のチョンブリーにある「Mangrove Forest Conservation Center, Chonburi。学校にあるテントを持参して着替える場所を用意したが、トイレや足を洗う場所等の設備も整っている。センターに到着後、生徒代表がタイ語で挨拶をした後、センター長さんからマングローブの植え方等の説明を受ける。事前学習をしていた生徒たちは様々な質問をしたあと、マングローブ植林用の地下足袋のような長靴を履いて移動した。植林場所で、階段を用心しながら降りて、教えていただいた通りに植林を行った。その後、泥沼を体感した生徒たちのはしゃぎようは心に残るシーンである。体験後の質問コーナーでは、「泥のにおい」に関しての質問が出た。実際に見学をし、植林を体験したからこそできる良質な問いである。ねらいであるマングローブ林や生態系に対する興味・関心を高めることができたと考えられる。また、「地球のためになりますようにと願いを込めて植えました。6～10 年たったら見に行きたいです。」「『自分たちに出来ること』を継続することが大切だと思った。『ごみを道などに捨てない』、『落ちていたら拾う』ことがマングローブを守るうえで大切だとおっしゃっていたので私も環境や自然を守るためのごみ拾いをタイでやりたいと感じた。」という振り返りから、自然環境とどのようにかかわっていけばよいか、自分の考えや意見が持てるようになったと言える。午前中の活動を無事終えた生徒たちは、泥の香りと達成感に包まれて、バスで学校へ向けて出発した。

学び（仮説）を検証する修学旅行

６年学年主任　工藤　隆太郎

９月４日（水）～６日（金）に６年生は、アユタヤ・カンチャナブリーの修学旅行に行ってきました。夏休み明けすぐでしたが、修学旅行に向けて子供たちは１学期から学びを積み重ね、準備をしてきました。世界遺産とは何か、アユタヤが世界遺産である理由、泰緬鉄道の歴史的な意味などを考えました。

さらに、泰緬鉄道建設に関しては、日本、欧米諸国、東南アジアの人々など、様々な立場から、泰緬鉄道とはどんな存在であったのかを考え、多角的に考えを深めていきました。そして、その学びをもとに一人一人が仮説を立て、何をどのように確かめてくるかなど具体的な視点をもって修学旅行で検証してくることができました。

子供たちは、一つ一つの見学場所においてその当時の様子に思いをはせ、その雰囲気を感じていました。カンチャナブリーの平和セレモニーでの子供たちの歌声はまさに平和の祈りが込められた素晴らしいものでした。

アユタヤのワット・チャイワッタナラームでは、タイの伝統衣装を着て写真を撮りました。衣装を身に付けて大人になった気分でとても嬉しそうに声をかける様子、笑顔が印象的でした。「修学旅行でアユタヤに行く」－こんな経験をした日本人の子供たちはなかなかいないのではないでしょうか。子供たちにとって、一生の記憶に残る修学旅行となったことと思います。

今年度着任された先生方の文章を順番に紹介していきます。

感じる心

佐藤　亜衣

シラチャ日本人学校に着任して 8 カ月が経ちました。来タイする直前は、楽しみな半面、初めての海外生活に不安もありました。実際に来てみると、日本との違いを感じることは多くありましたが、自分でも驚くほどの速さでタイの生活に馴染んでいきました。日本人の方たちは「どこで何が買えるか」「何に乗ればどこにいけるか」など、どうやって生活すればよいか教えてくれました。タイの方たちは、単語やジェスチャーだけで、私が伝えたいことを汲み取ろうとしてくれます。町中を見渡すと、全く読めないタイ文字でいっぱいですが、周囲の人たちのおかげで、今の生活を楽しむことができています。

こちらに来て、「ありがたいなあ」と感じることが多くなりました。そう感じることが増えたのは、慣れない環境に身を置くことで、私自身が周囲の人たちの優しさや心遣いを感じられるようになったからだと思います。日本にいたときは、自分の周りにあるものを当たり前だと感じていて、しっかりと感謝することができていませんでした。

タイでの生活には慣れてきました。しかし、周囲の人たちの優しさや心遣いには慣れることなく、感じる心をもちながら生活していきたいです。そして、もらった親切を誰かに返していきたいと思っています。

STUDY HARD, PLAY HARD!

髙野　小町

シラチャ日本人学校のみなさんが、タイ語と英語両方を学んでいること、本当に尊敬します。私は日本にいたときは、「外国語＝英語」という考えでしたが、シラチャ校での英語の授業中に、ある児童が「ヌン、ソーン…間違えた！one, two…」「マイチャイ！…じゃなくて、No!」とついタイ語が混ざってしまう場面が何度かあり、思わず微笑んでしまいました。シラチャ校のみんなにとって外国語の選択肢が 2 つ以上あるということは、単なる言語の習得を超えて、異文化への理解や将来の可能性が大きく広がっていることを意味しています。勉強は大変ですが、恵まれた学習環境で精一杯勉強してください。

言語学習は、続けなければ身に付きません。私も英語を忘れないために BBC ニュースやポッドキャスト、洋楽を聞いたり、友達と英語で電話したり、英語で映画や動画を見たりするなど楽しく学習できる方法で勉強を続けています。小学校から英語を勉強していても、いまだに知らない単語やフレーズはたくさんあります。母語でない限り、言語は一生学び続けるものだと思っています。もし日本に帰国しても、シラチャ校で学んだタイ語を忘れずに勉強し続ければ、きっとどこかでその努力が実を結ぶはずです。

最後に NET の James 先生の文章を紹介していきます。

Dear parents,
My name is James Thomas Poultney. I was born in Wolverhampton but grew up in a small nearby village called Wombourne in the county of Staffordshire England.

My father is a semi-retired engineer, electrician and mechanic, he loves to make things, his hobbies are building kit cars and making steam engines. My Mother was a teacher until she retired six years ago. And my sister is a detective in the British police force.

I studied political science at university in Liverpool, after achieving a B.A. I left England to travel and gain experience in education. I returned to the UK in 2019 and studied a PGCE in education and then worked in 4 schools across the UK.

In my free time, I love to read and have a passion for fantasy, horror and SI-Fi. I also love football (soccer). My team is the mighty Wolverhampton Wanderers or wolves for short. Cooking, gardening and hiking are my other passions in my free time.

Teaching is also a passion of mine. I understand the responsibility we have as a profession, and will always do my best to create a safe and engaging learning environment.

If you see me in or outside of school, feel free to say hello. And if you have any questions, don't be shy to ask.

I feel very proud to be a teacher at Thai Japanese Association School and look forward to working with you over the next two years.

Many thanks,
James.

保護者の皆様へ
　私の名前はジェームス・トーマス・ポルトニーです。イギリスのウォルバーハンプトンで生まれ、スタフォードシャー州にあるウォンボーンという近くの小さな村で育ちました。
　父はセミリタイアしたエンジニア、電気技師、整備士で、ものづくりが大好きです。
母は 6 年前に退職するまで教師でした。姉は英国警察の刑事です。
　リバプールの大学で政治学を学び、学士号を取得した後、旅行と教育の経験を積むためにイギリスを離れました。2019 年にイギリスに戻り、教育学の PGCE（教育大学院）を修了後、イギリス全土の 4 つの学校で働きました。
　私は読書が好きで、ファンタジー、ホラー、SI-Fi に熱中しています。サッカーも大好きで、私の応援しているチームは強豪ウォルバーハンプトン・ワンダラーズ、略してウルブズです。時間があれば料理、ガーデニング、ハイキングにも熱中しています。
　教えることは私の情熱でもあります。教師という職業が担う責任を深く理解しており、生徒にとって安全で魅力的な学習環境を常に作り出す努力を惜しみません。
　もし学校内外で私を見かけたら、ぜひ気軽に声をかけてください。また、何か質問があれば、遠慮せずにお尋ねください。
　シラチャ日本人学校の教師であることを非常に誇りに思っており、これからの 2 年間、皆さんと一緒に働けることを楽しみにしています。
　どうぞよろしくお願いします。
　ジェームス

12月の行事予定

日　曜	児童・生徒の予定	バス時刻	
1日（日）			
2日（月）	・全校5時間授業	14:20 P1-6　M1-3	★
3日（火）	・臨海学校(5年)　・オイスカシラチャ幼稚園実習(9年)10:20～12:30	14:20 P1 15:25 P2-6　M1-3	
4日（水）	・臨海学校(5年)	14:20 P1 15:25 P2-6　M1-3	
5日（木）	前国王誕生日（父の日）		
6日（金）		14:20 P1-2 15:25 P3-6　M1-3	
7日（土）			
8日（日）			
9日（月）	・クラブ(小学部)	14:20 P1-3 15:25 P4-6　M1-3	
10日（火）	ラッタタマヌーンデー（憲法記念日）		
11日（水）	・購買(注文票配布日)　・生徒会選挙	14:20 P1 15:25 P2-6　M1-3	
12日（木）	・個別面談（小）三者面談（中） ・全校5時間授業　・購買(注文票提出日)	14:20 P1-6　M1-3	★
13日（金）	・個別面談（小）三者面談（中） ・全校5時間授業　・学級だより配信(小学	14:20 P1-6　M1-3	★
14日（土）			
15日（日）			
16日（月）	・個別面談（小）三者面談（中） ・全校5時間授業	14:20 P1-6　M1-3	★
17日（火）	・個別面談（小）三者面談（中） ・全校5時間授業	14:20 P1-6　M1-3	★
18日（水）	・縦割り班活動(1～6年)　・個別面談（小）三者面談（中）　・全校5時間授業	14:20 P1-6　M1-3	★
19日（木）	・交流会(中学部)	14:20 P1-2 15:25 P3-6　M1-3	
20日（金）	・委員会(小学部)	14:20 P1-2 15:25 P3-6　M1-3	
21日（土）			
22日（日）			
23日（月）		14:20 P1-3 15:25 P4-6　M1-3	
24日（火）	・2学期終業式　・全校5時間授業　・生徒集会(中学部) ・学校,学年だより配信　・学級だより配信(中学部)	14:20 P1-6　M1-3	★
25日（水）	冬季休業		
26日（木）	冬季休業		
27日（金）	冬季休業		
28日（土）			
29日（日）			
30日（月）			
31日（火）	大晦日		

★は特別バスです。通常の下校バスと時刻が違うときについています。

5年　臨海学校

3日（火）から、1泊2日の日程で、小学部5年生がジャンタブリー県に臨海学校へ行きます。シラチャ校では、タイの気候を生かし、年間を通して水泳の授業を行っています。是非、ジャンタブリーのきれいな海で、これまでの練習の成果を発揮しましょう。

9年　幼稚園実習

3日（火）の3・4時間目に9年生は家庭科の授業の一環として、オイスカシラチャ幼稚園で実習を行います。この実習にあたり、子供たちが楽しめるおもちゃを生徒それぞれが考え、製作してきました。園児と一緒に遊んだり、昼食をとったりするなかで、家庭科の授業で学んだことを実体験してきます。

中学部　生徒会役員選挙

11日（水）は、中学部で生徒会役員選挙が行われます。これまでシラチャ校の最高学年として、学校全体を引っ張ってきてくれた9年生から、8年生、7年生へとバトンが引き継がれます。生徒会は、中学部の生徒全員で組織され、運営しています。より良い学校を目指し、みんなで力を合わせていきましょう。

中学部　交流学習会

19日（木）に交流相手校であるスッカボット校の中学生が本校を訪れ、交流学習会を行います。今年度はシラチャ校がホスト校として、実行委員会が中心となって準備を進めています。タイと日本の文化を紹介し合い、総合学習の成果を発表したりする時間を設けています。英語やタイ語を駆使して、日本とタイの友好の輪を広げましょう。

編入・退学時のプレゼントについて

例年、お子さんが退学されることになった保護者の方から「お世話になった学級のお友達に教室でプレゼントを渡して良いですか？」という質問が学校に寄せられます。多くの子どもが編入したり、退学したりしていくのは日本人学校の宿命です。お気持ちは理解できますが、一度それを認めると、プレゼントを交換することがお子さんの編入・退学時の慣例になってしまいます。編入・退学時の学校でのプレゼントの受け渡しは行わないよう、学校としては保護者の方々にこれまでもお願いをしております。

保護者の皆様のご理解とご協力をお願い致します。